

十七日先書勢、引為未下

其以得之、下書為至、先書

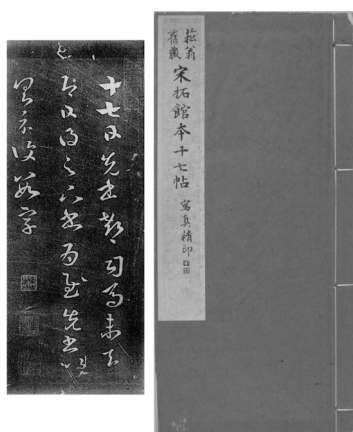
其不復、如字



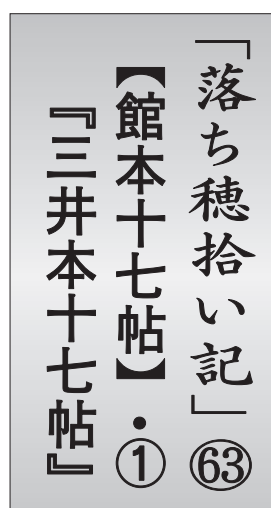
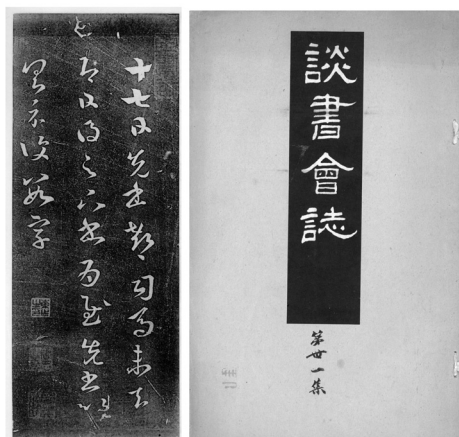
其有東、粗之、他佳、意觀、

為逸、此之、堪久、多之、河、

図②単行本『宋拓館本十七帖』
大正六年晚翠軒刊



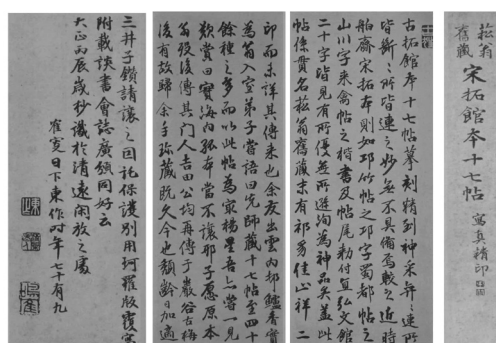
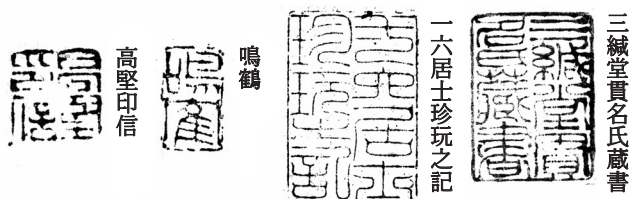
図①「談書會誌」



図③単行本「十七帖」に付された日下部鳴鶴の跋文

図④四人の所蔵者の鑑蔵印

- ⑤三井高堅 ④日下部鳴鶴 ③巖谷一六 ①貫名松翁



書学の初歩から発展して、草書学習に進む段階で多くの方が、書聖・王羲之の草書の手紙(尺牘)29通を収録した『十七帖』という法帖(始めの第一通目の手紙が「十七日先書...」で始まるにより、名称となり、また「館本」は、唐代の宮中の図書館・弘文館のテキストとされたことを示す。)を臨書されたことがあるであろう。今回から、草書の古典の王者とも言われる『十七帖』について、数回にわたり取り上げる。最初は、日本で最も著名な、幻の『三井本十七帖』を紹介しよう。

『三井本十七帖』とは、写真版の複製刊行当時の所蔵者・三井高堅(聴水閣と号す)に因んで称せられている。「十七帖」という手本は、恐らく長崎貿易で輸入され、江戸時代後期には数種の本が刊行されていた。『三井本十七帖』が、写真版の精印で発表されたのは、明治末から昭和にかけて刊行されていた書道雑誌の『談書會誌』である(図①)。大正3年から11回にわたり数頁ずつ掲載され、完結後単行本として出版され多くの版を重ねた(図②・③)。戦後も日本ではこの三井本が各種刊行され、多くの書学テキストにも使用されている。『談書會誌』の解説には、日本の近代書道の父とされる日下部鳴鶴の『三井本十七帖』の伝来等に関する解説が付されている。簡単に要約しよう。「...この十七帖拓本は、世界に唯一本のみの宋拓本であり、三井聴水氏の所蔵であり、古くは江戸末の貫名松翁の旧蔵本であった。唐時代の模写本を宋時代に刻し拓されたもので、真跡に次ぐ素晴らしいものである。筆画の転折の表現が美事であり、断筆の流れなどが他の十七帖に比べて優れ、最上の手本である。この十七帖は、江戸後期の書画家・貫名松翁所蔵本であり、貫名松翁没後、門人の吉田公均に、さらに明治の書家・巖谷一六に、そして一六から私(日下部鳴鶴)の手に帰したが、今老年に至り、これを三井高堅に託した」と。

この十七帖は、恐らく長崎貿易等を経て清国から輸入され、①貫名松翁②吉田公均③巖谷一六④日下部鳴鶴⑤三井高堅と転蔵されてきた。帖中には、こうした変遷を物語る鑑蔵印を見ることができる(図④)。右頁の主図版の3行目に日下部鳴鶴の「東作之印」、貫名松翁の「貫名包」「君茂氏」が捺されている。解説では、三井本のような重厚で、断筆の表現の鮮明な刻の拓本は類例が無く、世界で唯一本しか伝来しない「宋拓十七帖」の名品とされていた。三井聴水閣所蔵の数々の名帖が戦後確認されカラーで精印されてきたが、この十七帖だけは、現在もなお行方知れずである。それ故に、タイトルに幻の語を付した。

伊藤滋(書齋名・木鶏室)

書のひろば

理事長 下谷洋子

第78回書道芸術院展開催

第78回書道芸術院展は、今回行事も増え、天候にも恵まれたためかつてないほどの盛会で終了しました。

今回の表彰式は、上野精養軒で開催され、一般の表彰式後は同会場にてしばらく振りの祝賀会も行いました。

例年の行事に新たに一般上位入賞者による席上揮毫も加わり、最終日の全体作品解説まで、熱心な会員で溢れた嬉しい会場でした。

関係者の先生方には大変お世話になりました。ありがとうございます。

「書の世界」第78回書道芸術院展「革命者の意気」筆に込め

【桐山正寿】

第78回書道芸術院展（11日まで、東京・上野の東京都美術館）は、「努めて革命者の意気」（1947年の創立趣意書）を発揮しようと懸命な試みが続いている。

下谷洋子さん「ちち色の霧にまぎれて……」現代人としての決意が放射する言葉を凍とした書線に変体仮名の美を入れ込みながら描こうという高難度のチャレンジ。

小竹石雲さん「昇降機しづかに霧の……」一字一字にギリギリのデフォルメ

が施され、墨量の変化などを通して多彩な表情を演出している。筆に込められた強い感情が貫かれている。

後藤大峰さん「月星清々」古代文字が天体の中に放り出されて、さえざえと輝く。それを受け止める下部の辺縁もいい。どことなく可愛げな月と星を振り仰いで自らの存在を確認したくなる。

中核書人の真っすぐな試みが続いている。

総合書展としての魅力は健在で多彩な書の魅力を感じる機会となっている。

千葉蒼玄さん「分断（混迷の世紀）」▽真下京子さん「Koe-ru 超える」▽千葉紅雪さん「I・N・O・R・I」など前衛書の知的なたくらみ。

最首翠風さん「野鶯啼破春」▽半田藤扇さん「煙籠柳影乱驚啼……」▽小林琴水さん「一瞬」▽稲垣小燕さん「摩訶」など、漢字分野の奔放に解き放された覇気。

畑中弄石さん「いっぱい星だ……」▽坂本素雪さん「大地の深呼吸……」▽大隅晃弘さん「闇解く希望の歌……」など現代詩文書に込められた詩情とマニフェスト。

かなの熊谷翔さん「山里は春まだ寒し旅人の……」が最高賞の春華賞に輝いた。清新な線と情感が溶け合っていて、言葉を読み進める喜びが湧いてくる。（毎日新聞夕刊「書の世界」より）

第76回毎日書道展

主要人事決定

2月14日、第76回毎日書道展運営委

員会が如水会館にて開催されました。

本院関係の主要人事・主要日程
・運営委員（1月号に掲載済み）
・会員賞選考委員

理事 下谷洋子（か）
小竹石雲（近）
小林琴水（大）
北村白琉（前）

その他
種谷萬城（漢I）、中尾琴麗（漢II）、九條純代（かI）、勝山初美（かII）、武山櫻子・田村鄭雲・山崎掃雪（近）、川島舟錦・松浦錦扇（大）、嵯峨翔葉・三森慧香・山口仙草（前）

・当番審査員
・総務部
・部長補佐 大内焚軒
・審査部
・審査部長 種谷萬城（漢I）
・主要日程

4/8 事務局合同会議
5/12・13 受付・搬入
公募（U23、会友公募）は作品も搬入、会友は書類のみ搬入

5/14 篆刻・刻字搬入
5/23・25 鑑別
6/23・24 役員作品搬入
6/27・29 入賞審査
7/2 会員賞選考
7/3 文部科学大臣賞選考

○東京展「国立新美術館」
前期展I期
7月9日（水）～7月14日（月）
前期展II期
7月16日（水）～7月21日（月）
後期展I期
7月23日（水）～7月28日（月）

後期展II期
7月30日（水）～8月3日（日）
「東京都美術館」
7月18日（金）～7月24日（木）
これまでの北陸展（富山・福井・石川）関係作品は、今回、東京都美術館に展示

○関西展「京都府京セラ美術館」
「みやこめっせ第3展示場」
「日図デザイン博物館」
8月13日（水）～8月17日（日）
京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、滋賀の各府県

○東海展「愛知県美術館ギャラリー」
8月19日（火）～8月24日（日）
愛知、岐阜、三重の各県

○中国展「広島県立美術館」
8月19日（火）～8月24日（日）
鳥取、島根、岡山、広島島の各県

○四国展「愛媛県美術館」
8月20日（水）～8月24日（日）
徳島、香川、愛媛、高知の各県

○東北仙台展「せんだいメディアテーク」
9月19日（金）～9月24日（水）
宮城、岩手、青森の各県

○北海道展「札幌市民ギャラリー」
役員展「天丸藤井セントラルスカイホール」
9月24日（水）～9月28日（日）
北海道

○東北山形展「山形美術館」
10月15日（水）～10月19日（日）
山形、福島、秋田の各県

○九州展「大分県立美術館」
10月28日（火）～11月2日（日）
山口、福岡、佐賀、熊本、長崎、大分、宮崎、鹿児島島の各県

漢字書基礎基本講座 (10)

種谷萬城

温泉銘の拓本「幾積其妙」

幾積其妙

温泉銘の臨書「幾積其妙」

其妙

温泉銘の倣書「氣宇壮大」

氣宇
壮大

温泉銘より

「朕・世・民・基」字

朕世民基

温泉銘より集字

不不不不
不不不不

「不」

之

神神神神

無無無無

「無」

行書2 温泉銘

唐・太宗（李世民）は唐朝第2代の皇帝。唐王朝三百年の礎となる機構、法体制を整えた名君。学問、芸術、文化面への関心も強く、特に書を愛好し、王羲之の書に心酔。蒐集した書の名跡は数百巻と言われる。太宗自身も能書家で、史陵に学んだと言うが、欧陽詢、虞世南、褚遂良の名人が側近であったため、その益を受けたと思われる。また、王羲之の影響を強く受け、行書を得意とし、山西省太原に現存する碑・晋祠銘と、この温泉銘の石刻により氣宇壮大な書風が伝えられる。

温泉銘は、20世紀初めに、フランスのペリオが敦煌莫高窟の藏経洞に秘蔵されていた多数の古文書を発見。その中に、この拓本があった。温泉銘の原碑は既に失われ、この拓本が唯一残っており、現在フランス国立図書館に収蔵される。巻末余白にある「永徽四年」の墨書で、立碑五年の「唐拓独孤本」と証明される。太宗の署名はないが、文中、自らを「朕」と称し、「基」と「世」「民」字に避諱の欠画が無く、「晋祠銘」との書風が酷似し、唐・太宗の書と推定される。碑文は、陝西省臨潼県の驪山温泉の効能と言い伝えについて述べたもの。その書は、筆圧の強弱を駆使し、太細、曲直、大小の変化に富み、自由奔放でスケール大きく、屈指の帝王・太宗の強烈な個性が表出されたものであるが、太宗が崇拝した王羲之書法がこの根底に窺える。唐代行書の名跡の一つ。

ユーチューブ「筆のサロン」に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非ご覧下さい。QRコードでアクセスできます。



筆のサロン
QRコード

基礎基本講座

篆刻・刻字基礎基本講座 (10)

後藤大峰

今回は篆刻作品を創る際、印材に次いで、重要な印泥について、お話を進めて行きたいと思います。

もちろん、印泥は100パーセント、中国製です。

赤色の深い系、朱色系、赤系、等、メーカーによって様々あります。敢えて商品名は、ふせておきますが書道用品屋さんの店頭にて見比べて、ご自身の、お好みのものをお使い下さい。

印泥を、扱う場合、最も重要なのが、使用後の、後始末です。

印材に印泥を貼付し、使用した後、印泥を、容器の蓋を閉じたまま、放置しないことです。

必ず、付属の筆にて、底から、かき混ぜることが大切です。

印泥を使用する前もかき混ぜるとよいでしょう。簡単なことですが、これだけで、印泥の持ちが数段違います。

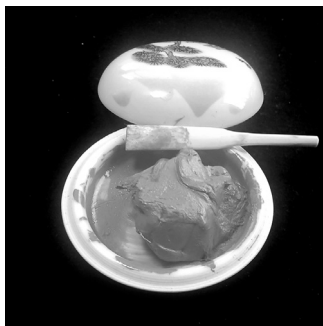
よく、カチカチに硬くなった印泥を「これ、どうして、こうなったのでしょうか？」と、おっしゃられて、お持ちになられる方が、おられます。かき混ぜることです。

別売りで「印の油」もあります。適量を印泥に混ぜて、硬くなった印泥調整をすることもできます。

書道用品屋さんにてお聞きなり、印泥調整をされ作製制作を、なさって下さい。

次回は、篆刻の、解説の最終回、その他の用具についてお話を致します。

その後は、刻字についてお話を進めたいと思います。



朱色系印泥

書道芸術院

令和の群像 (2025)



佐々木 青霞

「面白い」と思える体験から

書道を始めたのは、書写で毛筆をしっかり教えたいという、教員としての願いからである。大学卒業後、小学校教員として勤め、全ての教科を教えることになった。私自身が満足に教えることのできないことが山ほどある。例えば、音楽、絵画、毛筆、バスケットボール……。伴奏は諦めてCDを流し音楽の授業を行った。絵画は研修会

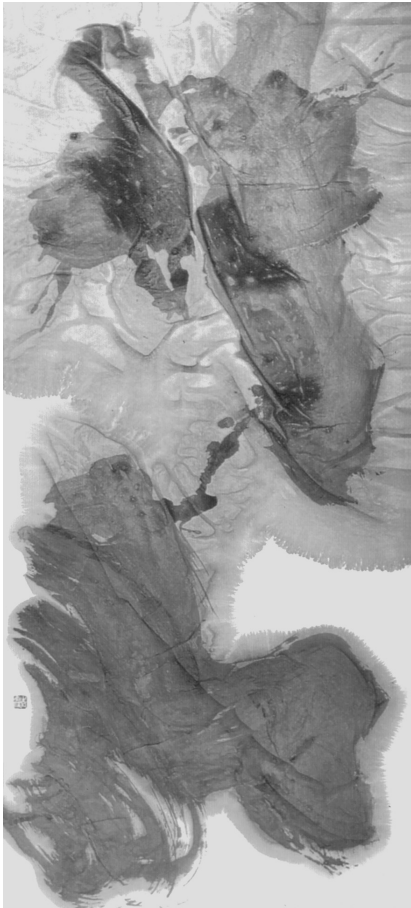
に何度も足を運び学んだ。水泳は、スイミングに通った。実技の知識や指導技術が足りなかった。毛筆も同様である。

書道を習おうと担任する子どもを通して紹介してもらったのが、大内魯邦先生であった。稽古に通うと手本を書いてくれる。その際、何度も書き直し、初心者の方に渡してくる。それで十分なのだと思います。席に戻り書いてみるが、手本にはほど遠い。それでも稽古に通い続けていると少しはましになり、次第に面白くなる。競書で写真

版に選ばれると頑張ろうと思えた。

ある日、師匠から「講習会に参加してみないか。」と誘われ参加した。それが前衛書の研究会であった。夜遅くまで参加者が夢中になって大きな作品を書いている。見たこともない大きな筆で。当時、多くの参加者が黒々とした作品を書いていた。参加者の熱気に気圧され、筆を運ぶ力強い姿に驚き、借りた筆で書けない自分に不甲斐なさを感じたことを記憶している。後にも先にも師匠に前衛書の手本を書いていただいたのはこの時だけである。今思い返すと、臨書ばかりしていた私の創作初挑戦であった。その後、千葉蒼玄先生にお世話になり、今日に至っている。入門して35年を経過しても、飽きっぽい私が今でも書が続けられているのは、「面白い」と感じていたから。そして、蒼玄師匠の人柄と多くの書友に支えられてのことである。

少子高齢化が進み、書道人口減少に歯止めがかからない。書の楽しさを若い世代に体験させる工夫はないものだろうか。各書道会では、本展とともに学生展が併催されている。地域で各種の書道展も行われる。その多くが書を習っている子ども達の作品である。最近YouTubeで書道展や書家の揮毫する映像をよく観る。若い世代に身近なSNSのいいだろう。人の集まる場所での書のワークショップや書道パフォーマンスもよいと思う。未経験者が「面白い」と感じるような機会を増やし、書の楽しさを知り書を学び続ける若い世代が増えるよう努めていきたいものである。私自身も何ができるか考え行動していきたい。



2022年河北書道展「情動」

佐々木 青霞 書

書道芸術院 令和の群像 (2025)



第76回書道芸術院展「芭蕉句」

坂本龍水書



坂本龍水

「新しい書に挑戦」

ペンを持ち始めるようになった頃から、広告の裏に絵とも字とも見当がつかない悪戯書きをするのが好きな子どもだった。そうしたことが書を通じて自分を表現する源になっている気がする。

皆川祥雲先生の書塾に通い始めたのは小学1年生の秋、とにかくのびのび書くように、高校に入学してからは芯の通った強い線を引くようにとご指導いただき、今に至っている。二十歳を過ぎた頃、幸運にも種谷扇舟先生の門下生となり、先輩方の大きな紙に大きな字を自由に表現された作品、淡墨の美しい色に感動、カリキュラムでは原拓を直接用いてのご教授にとても驚き、今も鮮明に心に残っている。扇舟先生には、本物、一流を観ることに大切さ、古典を通して多くの表現を学ばせていただいた。現在は、萬城先生のもと、漢字部の先生ならではの様々な教えが、次の閃きへと導いて下さっている。

諸先生、先輩方に囲まれ、中断した時期もあったが、今まで書が続けて来られたことに心から感謝したい。

現代詩文書は、漢字、かな、カタカナ、ロー

マ字を無限色の墨、多様な筆、紙を用い、自由な構図で時代にマッチした表現ができるところに大きな可能性を感じる。作品制作では、2次元の紙面に対して立体感、そして遠近感をどのようにして出せるか、詩や歌、俳句等がもつドラマ性が表現できているだろうか、品格、風格、etc……色々と頭の中を巡らせているうちに、どこかチグハグな書になってしまふ。制作に行き詰まると生成AIの方が上手に仕上げるのではないかと……と試してみたりする。それでも、上手、美しいだけでなく、紙面から何かしら、魂みたくいなのが滲み出てくる作品を書きたいと紙に向かっている。書は線を引いて成り立つ芸術、真^{まこと}新しい紙と対峙する瞬間が好きで筆を運ぶ。

6年前の熱海での講習会で辻元大雲先生が、「艶のある線」を力説され、このフレーズが頭から離れないでいる。「強い」に加え、白が生きた、艶のある線を目指すきっかけとなった。納得するということは無いと思うが、一本一本工夫し、丁寧に線を引くことを心がけている。デジタルとアナログが混在するこの時代、どの方向に向かって、何をどのように表現したいのか、未だ迷路の中にいる。今回の執筆を機に原点に立ち帰り、臨書を軸として様々な「書」に挑戦していきたいと思う。

新 鋭 礼 讃



漢字部
総務・審査会員
種谷 悠輝

(千葉県)

所属 白扇書道会
師名 種谷萬城
参加している書展
毎日展、白扇書道
会展、千葉県展他



「連雲勢」

作品自評

「連雲勢（連雲の勢い）」高大で雲の連なるようなようす。唐の汪遵の「長城」詩の一句「焉知万里連雲勢」（焉んぞ知らん万里連雲の勢い）から選びました。この作品は、今年1月に行われた、第30回白扇書道会選抜展に出品した作品です。今回は淡墨で、草書を交え、線の太細や墨の潤渾の変化など、生き生きとした勢いのある動きを心がけて表現しました。様々な筆や紙を試し、墨色などを工夫し、制作においての試行錯誤を楽しみながら書きました。

書活動における課題

書は臨書が基礎にあり、創作へと発展していきます。技法や表現力、鑑賞力を向上させるには、この繰り返しでしかあ

りません。一つ一つの積み重ねを大切に、また視野を広く持ち、様々なことに目を向け、自分らしい書を追求し、創作活動を行っていききたいです。

今、伝えたいこと

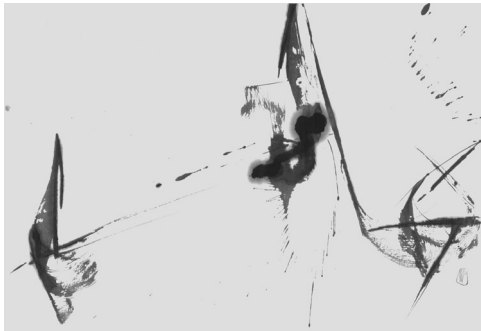
日頃は、幼児から大人まで楽しく書が学べるよう指導にあたり、白扇書道会などの行事に参加し、書を勉強しております。まだまだ未熟ですが、書の楽しさを多くの方に伝えられるよう、書の普及、発展のため少しでも役に立てるよう、これからも活動していきたいと思います。今後ともご指導・鞭撻のほど宜しくお願い致します。



前衛書部 審査会員候補
相内 沙莉

(東京都)

所属 白珠社
師名 工藤永翠
参加している書展
毎日書道展



「斜光」

作品自評

今までは「書くこと」、すなわち「黒」ばかりの意識であった。近年は臨書を通して得た感覚として、「白（余白）」を作ること注力している。「黒」がヨレていてはその余白美は見えてこない。平安かなのように、引き締まった線をもって明るさを表現してみたいが、やはり弱い思い描く、奥行きのある作品には墨の研究も欠かせない。

書活動における課題

年に数回地元青森で開催される講習会に参加し、競書などは添削指導を受けている。自分で考えて書く力を鍛えるためには、苦しいが有意義な稽古である。また、諸先生方より助言を頂き、自分の書論を持ち、漠然としていた目指す書の道、

在り方を言語化すべきだと再認識した。今、伝えたいこと

昨年末に、江戸末期に建てられた有形文化財の家屋に滞在した。修繕設計は隈研吾氏である。昭和の増改築でできた壁を取り払い、光と風が心地よく抜ける土間には、煙の煙が立ちこめる。暗がりにつつと差し込む光の美しさ。まさしく「陰翳礼讃」の精神を体感した。生活と自然が一体化し、懐かしさもあるが、この時代に生きる私にとっては、どこか「新しさ」もあった。師は「新しい表現に挑戦し続ける精神が不可欠である。」と、作品でも魅せてくださる。私の希求する日本の美意識に潜む幽玄、「余白」を反芻し、温故知新の精神をもう少しつぶさに眺めてみたい。

第56回

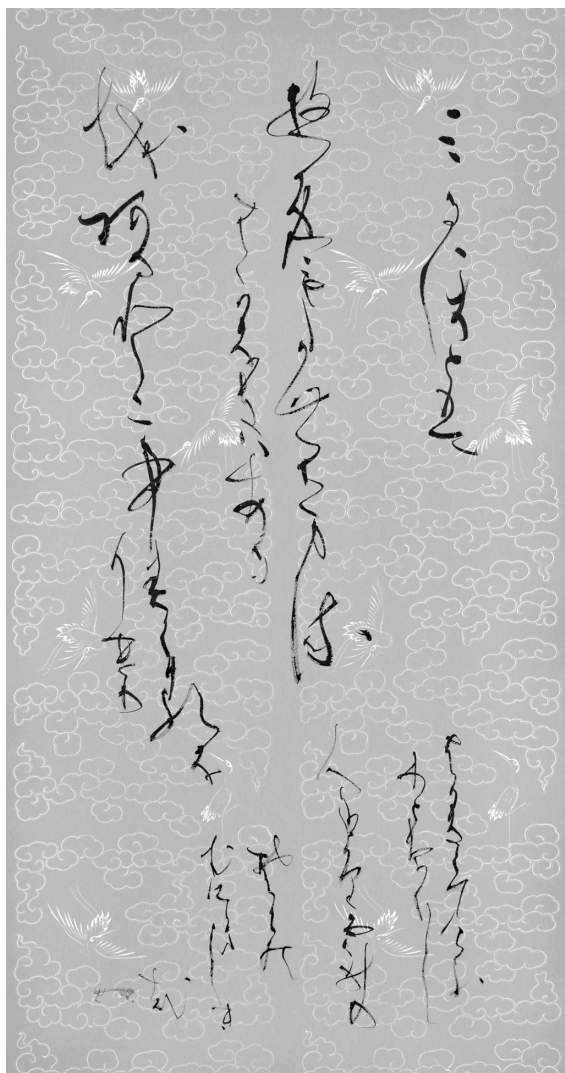
現代女流書展

同時開催＝現代女流書新進作家展

- ・ 2025年2月27日(木)→3月3日(月)
- ・ 日本橋高島屋S.C.本館8階ホール

みる程は／夢も頼まる／はかなきはあ／をあるとて過ぐるな／りけり／
はかなくてけぶ／りとなりし／人により雲ゐの／空の／むつまじき／かな

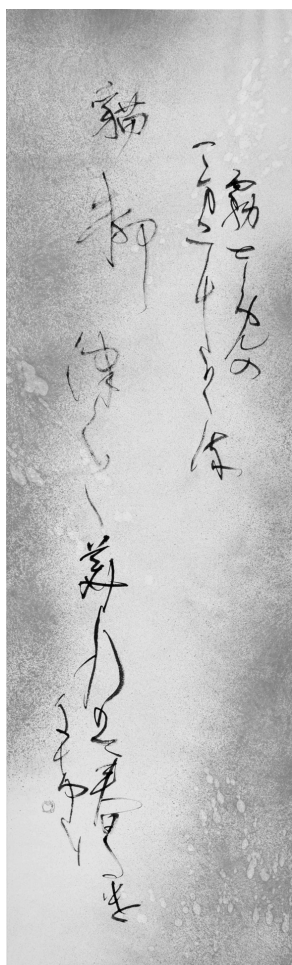
〈運営委員〉 下谷 洋子



〈みる程は〉『和泉式部集』

131×69cm

〈霧雨の〉 北原白秋



松村くに子

184×54cm

〈玉響〉
たまゆら



半田藤扇

175×70cm

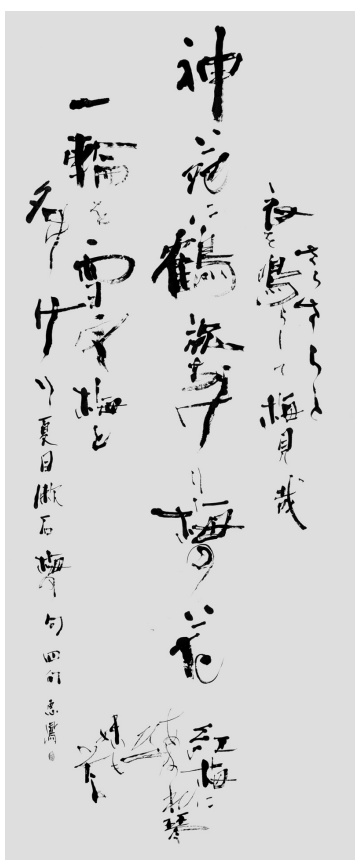
〈千鳥の句〉 鳥居美智子



山崎掃雪

104×136cm

〈夏目漱石の句四句〉



飯沼恵鳳

181×75cm

〈慈〉



小林琴水

135×104cm

〈萌〉



崎井恵鳳

136×105cm

〈石原八束の句「人とその影」〉



町山美扇

130×100cm

〈必〉



岡田 瑤韻

182×60cm

〈2025〉

大嶋 珀曄



109×141cm

〈邇上^{そじょう}〉



三森 慧香

168×71cm

〈いのりづける「分断から融合へ」千葉紅雪〉

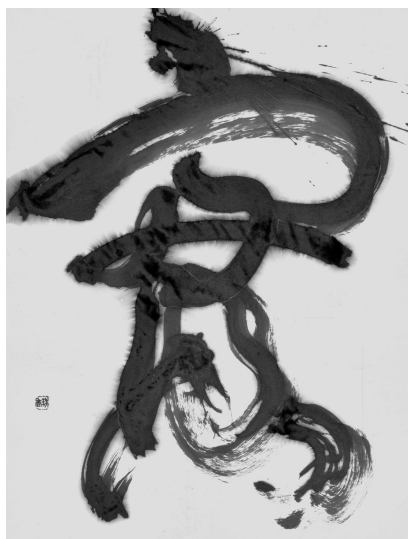


106×138cm

新進作家展

〈實〉

浜口瑞香



120×90cm

〈芽吹き刻〉

一條紅蕭



172×47cm

〈夕風海〉 菊池優

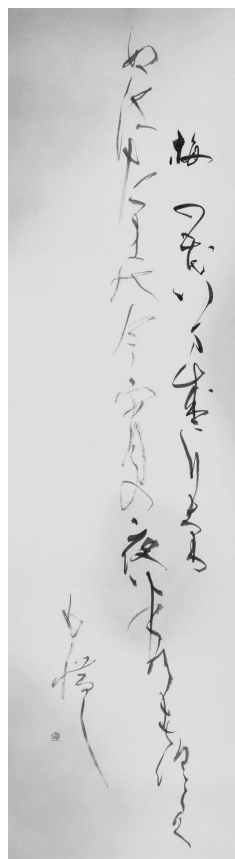
菊池富美子



174×57cm

〈梅の花〉 良寛

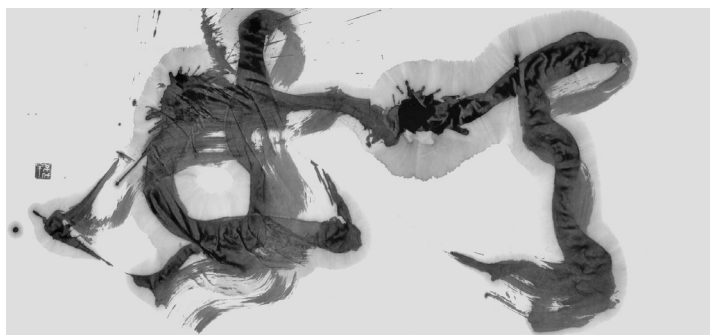
見越雪枝



171×46cm

〈天女〉

朝倉希代子



71×152cm

古典鑑賞

(478)

金文③ (號季子白盤)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨(押印のみも可)

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ (A 大作の部 毎日展覧会員・会費サイズ以内、2×6尺、金紙も可)
(B 小品の部 半切以下、平切以内、金紙以外も可) 当該古典の左記掲載部分以外も可。

〈解説〉西周の金文は、前・中・後の3期に分けられる。前期は雄渾な筆致の書が多い。中期以降は文章も長文化し、整齊で典雅な落ちつきのある書風のものが多くなっていく。駄毀、散子盤とともに、今回の號季子白盤は後期の作品である。

盤は普通は円形だが、この盤は長方形。その銘文は8行11字。内容は號季子白が洛北の地で獵狁を撃退して功を立てたというもの。字形はおおむね縦長で引き締まり、字間と行間を広く取ることで氣韻を出している。

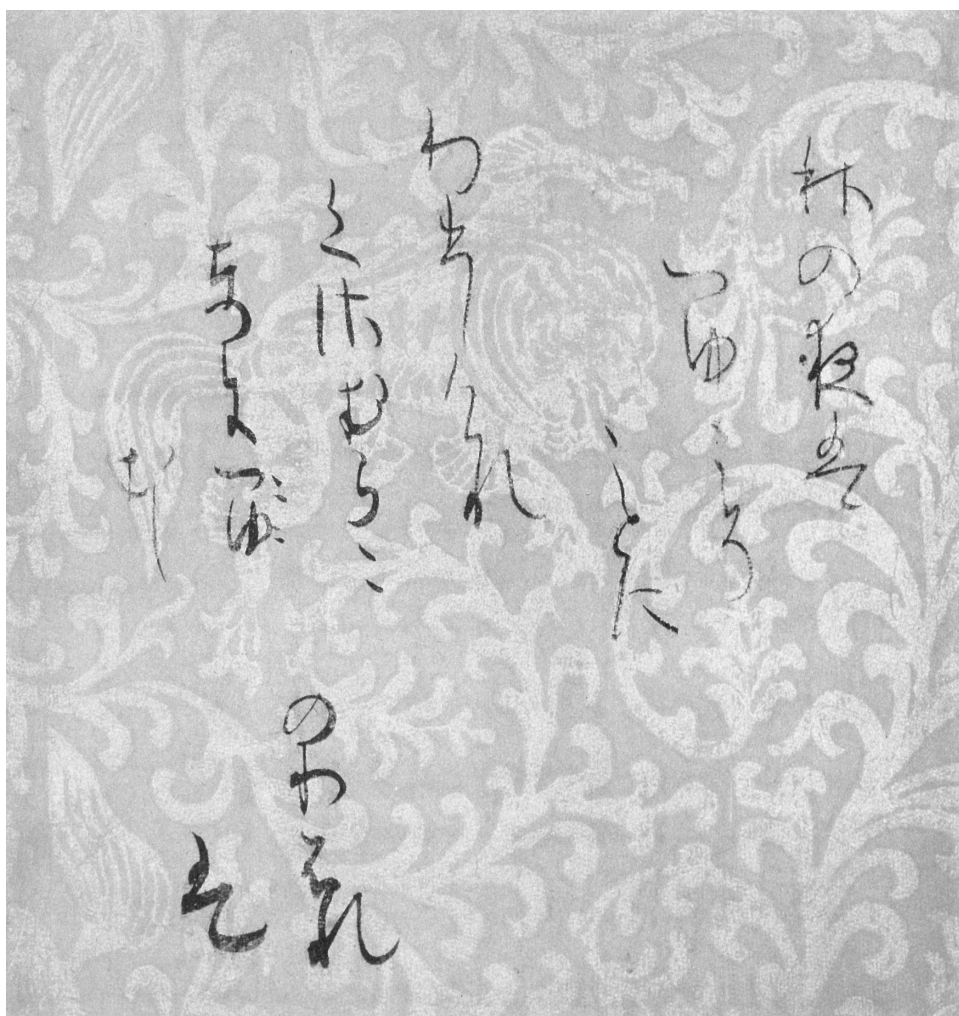
(編集部)



※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています。

不顯子白 辛于 / 戎工經綫四方 虢 / 伐獵狁于洛之陽

(中国歴史博物館(北京蔵))



※掲載図版原寸

〈よみ〉
秋の夜は[■]つゆこそ[■]むし[■]むし[■]
ことに[■]わびしけれ[■]
くさむらこ[■]
とにつゆ[■]
むし[■]
ば[■]のわぶれ[■]

〈解説〉今月の課題の「散らし」は「上下分裂式」と呼ばれるもので、上部と下部に分かれている。下部は字数が少ないので「従」であるが、この場合は全体のまとめとして重要な役割を果たしている。太い線が強調され、最後の「盤」の横線2本の太さは寸松庵の中でも特異である。またこの字の形も上部が省略されるところに、最終画の長さと収筆の跳ね上げの穂先の方向が珍しい。

「主」にあたる上部は前半3行と後半4行に分かれ、それぞれの行は右に流れ左に傾斜する。その角度の取り方に違いがあるので留意したい。行頭の位置（高さ）も重要である。

6行目の「つゆ」は誤記であり、見せ消ちにして隣に「むし」と訂正している。臨書の際、「つゆ」と「むし」は書くべきだが、「つゆ」の横の点は書いても書かなくてもよいであろう。（編集部）

かな研究部臨書課題

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懷紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部臨書課題

A. 大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部＝半切 $\frac{1}{2}$ 以上、半切以内（縦横自由）、全紙 $\frac{1}{2}$ 以内も可
＜いずれも上記の掲載以外も可。＞

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

漢字規定 初段以上 【4月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

習い方解説 (3)

名越蒼竹

沙邊雁鷺泊

(沙邊 雁鷺泊す。)

(常建)

川辺の砂地では雁や鷺がねぐらにつく。

章法は事前の設計が大切だとしても、計画どおりに作品が完成するとは限りません。その場合、部分的な修正のために予定変更もあり得ます。それでもだめな時は文自体を変えざるを得ないこともあるでしょう。最終的には「余白」が美しいかどうかで作品完成の成否を決めます。余白はその字面からそれほど大事なものでないように思えますが、書にとっては線質とともに重要な価値を含んでいます。字の中の「白」・字間の「白」・行間の「白」が互いに響き合っていて美しいかどうかは、作品完成に向けての大きな課題です。そこに関係するのが墨の濃淡・潤濁、点画の大小・長短・曲直・肥瘦等の変化などで、「形も線質ともに重要」というのが私の考えです。

沙邊雁鷺泊 よみ(沙邊雁鷺泊す。)

書体Ⅱ自由



漢字規定 秀級以下 【4月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

田村鄭雲選書

習い方解説 (3)

田村鄭雲

仁智明達

(仁智明達)

(四字熟語)

優しさ(仁)と知恵(智)を磨き人に尽くすこと。

「仁智」は慈しみ深く賢いことで「明達」は聡明で理によく通じていることです。どちらも私には及ばないことです。

今回は欧陽詢の九成宮醴泉銘を参考に書いてみました。楷書の完成形である彼の書は誰が見ても知的で美しく、書いてみたくなる書と思います。字形は縦長に構え、胴を引き締め背勢、架間を均等に作る等、隙のない結体で慎重さと緊張感が漲っています。

掲載の作品は明るく軽快に書いてみました。唐代より以前の墓誌銘に近いかもしれません。九成宮醴泉銘は欧陽詢が76歳の書です。私もそれまでもっと研鑽できればと思います。

仁智明達

鄭雲書



仁智明達 よみ (仁智明達)

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【4月15日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

松村くに子選書

習い方解説 (3)

松村くに子

花見れば心さへにぞうつりける
色にはいでし人もこそ知れ

（凡河内躬恒「古今集」）

すっかり衰えてしまった花を見て
いたら自分の心まで変わってしまった。
しかし顔色には出しません。
私の移り気を人々が知ってしまう
といけませんから。

かな作品創作において、字の大小、疎密は大切です。行の流れを損ねないよう留意しながら運筆します。後半、縦長の字を入れ、行としての全体のバランスをとりました。最後尾の「れ」を行から少しずらしましたが、このかな的表現方法も変化を生むかと思えます。

墨継ぎは「い」です。

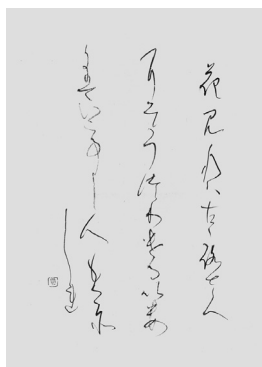
〈参考〉

よみ方

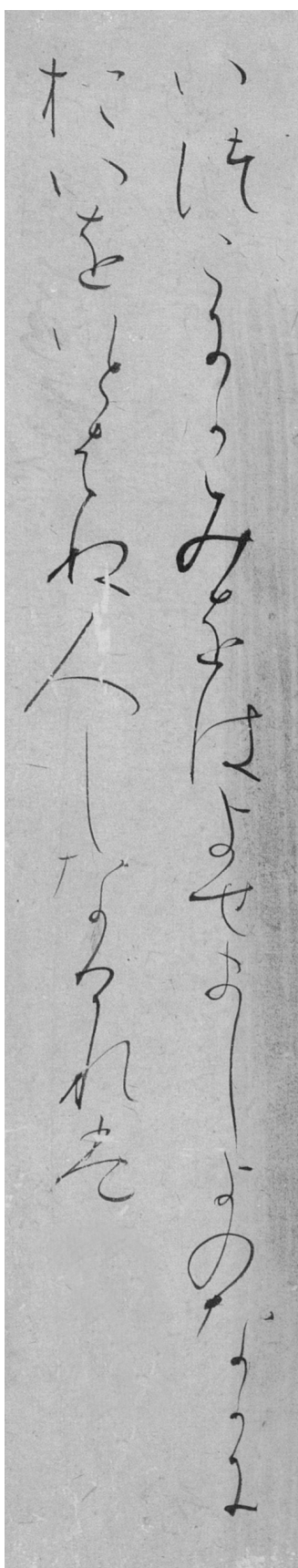
花見(み)れ(禮)ば(ハ)心(古)路(さ)へ(遍)に(ニ)ぞ(所)うつ(徒)りけ(介)る
色に(耳)はい(以)で(天)じ(志)人もこそ知(し)れ(連)

創作

* 料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。半懷紙は上記のサイズに切って下さい。



かな規定 秀級以下 【4月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)
掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。粘葉本和漢朗詠集(掲載写真拡大120%)



よみ方

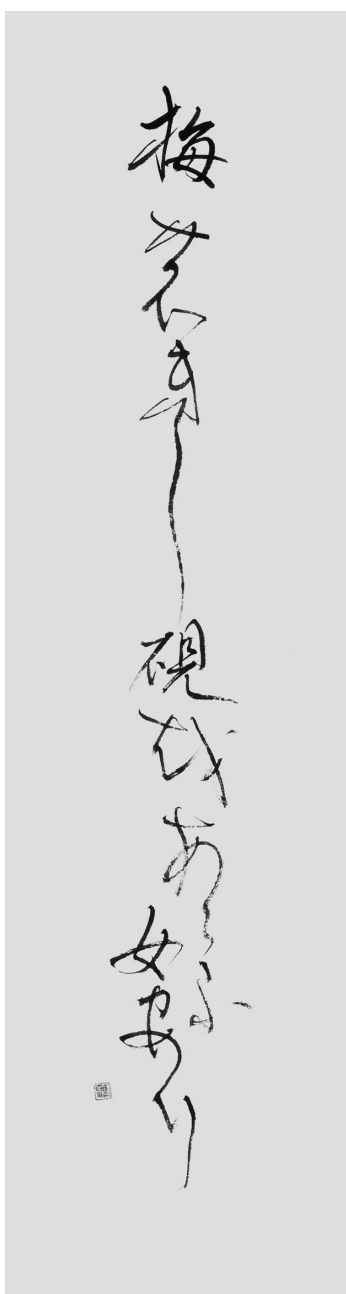
いづこにかみ^能をばよせましよのなかに^可
おいをいとぬ人^可しなけれ^能ば

歌意

「老い」がもし、人だとしたら、いったいどこに身を寄せたらよいのでしょうか。世間では誰だって彼を避けようとするのですから。「老い」を擬人化して解釈しました。

かな条幅規定 【4月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

勝山初美選書



よみ方 梅の(農)岸(幾之)硯を(越)洗(あら)ふ女あ(安)り

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (3)

勝山初美

梅の岸^{うめ}硯^{いすずり}を洗^{あら}ふ女^{をんな}あり

(内藤鳴雪)

梅の咲く岸で硯を洗う女の姿に、花・水・墨の匂いが重なって、清らかな品位を感じる句です。

漢字部分で気脈がとぎれないよう、リズムを続けて連筆しましょう。行尾は隣り合う行の墨の潤濁により立体感を出します。墨継ぎは女で行いました。

漢字条幅規定 初段以上 【4月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小竹石雲 選書

習い方解説 (3)

小竹石雲

大道直如髮 春日佳氣多 五陵貴公子 雙雙鳴玉珂
大道直きこと髪なほの如く春日佳氣多し 五陵の貴公子そうそうき双々玉珂を鳴らす

大道直如髮 春日佳氣多 五陵貴公子 雙雙鳴玉珂

(儲光義)

書体Ⅱ自由

(大道直きこと髪なほの如く春日佳氣多し)

五陵の貴公子そうそうき双々玉珂を鳴らす

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下 【4月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

飯沼恵鳳 選書

習い方解説 (3)

飯沼恵鳳

勤為無價之寶 忍是衆妙之門
勤は無価の宝と為し 忍は是れ衆妙の門なり

勤為無價之寶 忍是衆妙之門

(藤澤南岳)

書体Ⅱ自由

(勤は無価の宝と為し 忍は是れ衆妙の門なり)

大意は、「勤め励むことは無上の値打ちのある宝である。忍耐を守る事が多くのことを成しとげる一番大切なことである」です。柔らかな羊毛筆、濃墨を使用し、行書で1行目に流動性を持たせるために、連綿を加えて、羊毛筆特有の渴筆を活かしながら、優雅な書、温雅の美を目指して書作してみました。

埴生の宿も我が宿
玉の装い羨まじ
のどかなりや春の空
花はあるじ 鳥は友
おゝ我が宿よ 紅瑤書

書体＝自由

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守って下さい。

習い方解説 (3)

倉林紅瑤

唱歌『埴生の宿』は元々、イングラランド民謡でしたが、現在歌われている曲はアメリカ人のJ・H・ペイン作詞、イギリス人のH・R・ビショップ作曲となっています。原曲は『ホーム・スイート・ホーム』。訳詞は里見義徳で、明治22年(1889)中学校の音楽教材として採用されました。

「埴生の宿」とは埴輪などの焼き物に使う赤い土でできた粗末な家の意味。そんな家でも育った家ならすばらしい、豪華な装いもうらやましくないと、清貧をたたえるこの歌は敵国の音楽ながら戦時中も歌うことが許されていました。ゆったりとしたメロディーが心に響きます。『ピルマの堅琴』や『火垂るの墓』などの映画の中で使われ、重要な役割を果たしました。

平がなを連綿する場合、さまざまな方法を理解し、連綿線の長さや方向に留意しながら無理なく自然に続けることが重要なポイントです。

埴生の宿も 我が宿
玉の装い 羨まじ
のどかなりや 春の空
花はあるじ 鳥は友
おゝ我が宿よ ○○書

季節の言葉・七十二候より

芒種第二候 鵙げき始め鳴く

夏至第三候 半夏はんげ生ず

小暑第三候 鷹すなわ乃ち羽白を学ぶ

大暑第一候 腐草びき虫と為る

佐藤一義

季節の言葉・七十二候より／芒種第二候 鵙げき始めて鳴く／夏至第三候 半夏はんげ生ず／小暑第三候 鷹すなわ乃ち
習を学ぶ／大暑第一候 腐草虫と為る／氏名

書体＝自由

(掲載手本85%に縮小)

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る

漢字部 師範 鷺山 美梢

たっぷり墨を含ませて空中を舞う多彩な線にロマンを感じる。羊毛筆の柔軟さと相俟って楽しい。

◎漢字部総評 上位作品には線の表現領域が広く楽しく拝見できた。古典から創作に持っていかないと低俗になってしまう。(石雲評)

かな条幅部 準師範 佐藤 綾奈

締まった線が歯切れよく、控え目なリズムが行間を美しくした。少々曖昧や過剰が散見して残念。

◎かな条幅部総評 最近では青墨や薄すぎる墨は使いません。また掠れが多すぎるのも汚く見えます。変体は確認しましょう。(洋子評)



漢字条幅部 師範 田中 翠恵

筆の弾力を巧みに用い、線が生きて心地よい。字形も安定し、力量の高さが窺える作品。

◎漢字条幅部総評 上級は行草書作品の質が高かったが、草書の字形に難点のある作も見られた。丁寧な文字調べが大切。(萬城評)



ペン字部 師範 久下 香奈

ペン先が自然に流れ全体が温雅で格調を高くしている。力み等なく、歌の情景が浮かんで来る。

◎かな部 師範 榎田 和子
書き出し1文字の大きさを深慮した構成は作品全体の余白に良い響きを与えている。強い線条魅力。

美少女の巖頭に立ちて
黄金の櫛より髪のみだれを
梳きつつ口吟ぶ歌の声の
くすしき魔力に魂もまよう
「ローレライ」より 香奈書

◎かな部総評 漢字を変体がな、反対に、かなを漢字に変換した作品に工夫が見られ秀逸作が多く、好感触であった。(峰子評)

現代詩文書部 特選 坂本 芳博

安定感ある字形と骨力ある線条が柔軟で雄大な運筆は風格が漂う。

前衛書部 特選 相内 珠莉
筆致に重量感あふれ、エネルギー感あふれる快作。巧みな筆捌き、瞬発力ある渴筆も魅力的。



選評 広瀬舟雲

◎実用書部総評

第一候が三つの次に第二候となるのだがこも第一候と記された残念な作あり。課題にルビの記された所はこれも必ず記して下さい。
(舟雲評)

特選 三村 龍苑

おだやかな線で丁寧な揮毫。明るく品位に満ちた細字。大褒良好。

季節の言葉・七十二候より
立春第一候 東風凍を解く
雨水第一候 獺魚を祭る
啓蟄第一候 桃始めて華さく
春分第二候 雷乃ち声を發す
三村 龍苑

特選 木村 閑美

動きが大きく絶妙な行書での揮毫。自然な運筆でかつ雄大。

季節の言葉・七十二候より
立春第一候 東風凍を解く
雨水第一候 獺魚を祭る
啓蟄第一候 桃始めて華さく
春分第二候 雷乃ち声を發す
木村 閑美

青蓮	秀苑	龜松	竹原	白扇	紅瑤	佳	楓会	幸扇	明香	福山	紅瑤	四谷	大雲	秀水	春汀	秀	宗苑	大雲	うる	一貫	福島	特選	
小野	落合	池田	池田	藍澤	相澤	作(60書)	吉田	山本	矢部	徳永	須田	鈴木	鷺山	坂井	上利	作(60書)	茂木	飯高	奥村	木村	三村		
朱星	敏苑	直子	俊美	白瑤	敦子	裕	梅香	香苑	永宣	裕子	香舟	白鷺	美梢	初江	啓子	絢水	美楓	幹生	開美	龍苑			
堂光	書遊	若葉	ここ	四枝	洪川	高真	玉川	八街	芳蘭	千葉	もく	吉岡	八街	浅田	貴子	入選(60書)	大雲	紅瑤	長月	有秋	澄春	雲雀	
佐藤	佐藤	工藤	北爪	加藤	大竹	岩上	今永	井ノ口	板倉	安藤	叙孝	新井	虻川	貴子	貴子	渡	廣戸	原澤	竹浪	高橋	新行	笠原	
光耀	華園	山房	鼓祥	麗流	紅華	明美	咲子	春峰	智恵	丹美	叙孝	藤雪	良子	貴子	貴子	妙華	美岐	典子	叙舟	子蘭	芳蘭	紫玉	
(選外381名氏名略)	華仙	青蓮	やま	華仙	八街	大雲	もく	八街	耕雲	紅月	林田	西川	永井	樋泉	鶴見	立精	生大	深大	有秋	華祥	伊呂	常盤	深大
	山本	山口	山口	柳瀬	三浦	松山	本郷	深澤	林田	林田	幹子	藤家	伯泉	雪室	嘉美	白香	多村	武山	高木	鈴木	代田	清水	
	美楓	恵	律子	雪翠	小樹	峰生	谷恵	桂月	房子	幹子	藤家	藤家	伯泉	雪室	嘉美	白香	多村	武山	高木	鈴木	葉子	良子	

現代詩文書部(特選)



美雪 広かりある湛筆雄大な作
交 余曰美し、強刃な泉響く

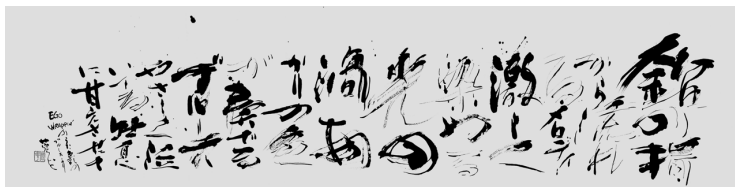
今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 半田藤扇 白石和楓 北村白琉

小品の部

現代詩文書 (蓉花) 坂本 蓉花 「色彩のブルース」
(エゴラッペンのうた)



坂本 蓉花 書

35×138cm

◆多彩な線が魅力溢れてブルースのメロディーを奏でるが如く、心ゆくまで楽しい雰囲気表現されている。とても良い。落款について一考か。
(和楓評)

前衛書 (蓮紅杜)

大友 紅蓉
「始まり」



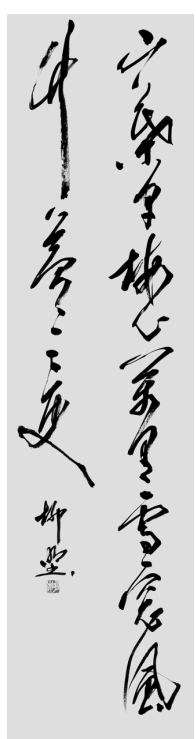
135×35cm

◆縦長の紙面を走る鋭い細線に渴筆を効かせた見事な構成。余白の取り方も上手く、動きのある明るい作品となった。
(白琉評)

大友 紅蓉 書

漢字 (水茎)

中野 柳明
「七言二句」



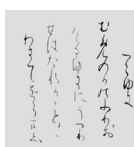
136×35cm

◆小気味よいリズムで、筆力が充実し、調和のとれた存在感のある作品である。悠然と書き進むところに、習熟した手腕が窺える。余白も美しい。
(藤扇評)

中野 柳明 書

臨書 (宗苑社)

茂木 絢水
「寸松庵色紙」



部分拡大

◆潤筆の粘りと切れ、渴筆の穂先の扱いなど、揺るぎなく習得しています。墨色もこの料紙に合う濃さで、濃淡のバランスに引き込まれる。
(洋子評)

茂木 絢水 臨



135×35cm

〈小品の部〉

創作の部(42点)

漢字 6点

かな 6点

現代 21点

前衛 9点

臨書の部(44点)

漢字 40点

かな 4点

総出品点数

86点

〈特選候補者〉

〈創作の部〉

麗澤 長谷川 翠

恵月 重村 恵月

「かな」

奥田 大西 和子

和平 井上 芝雲

「現代詩」

白扇 豊原 緑風

仙台 熱海 桃翠

植松 梅田 紅雨

玄穹 千葉 陽子

「前衛」

秀水 坂井 初江

大拙 佐藤 陽子

「臨書の部」

「漢字」

大雲 江本 興舟

華祥 岩淵 俊雄

千葉 渡辺 柱雲

やま 白鳥 眞智子

四枝 奥川 麗流

若葉 工藤 山房

洞書 安藤 楊風

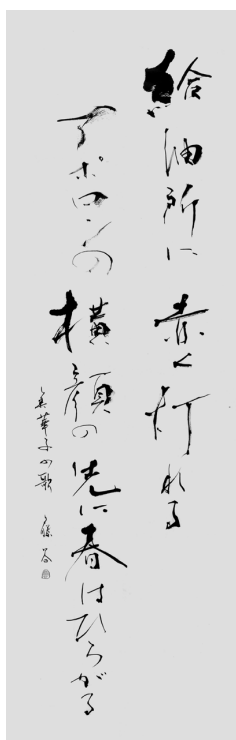
華祥 加藤 雅芳

八街 三浦 英樹

もく 岡部 藤瓊

現代詩文書 (もくせい)

森田 藤谷
「美華子の歌」



森田 藤谷 書

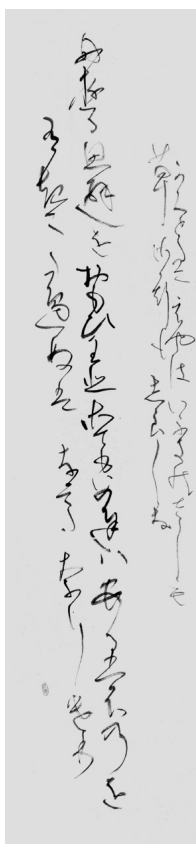
157×57cm

◆細線がキリリと引き締まり、墨量のある漢字とのバランス良く、一貫性のある良い作品である。爽やかな広がりに見る春を醸し出している。

(和楓評)

かな (奥田)

小林 純風
「かくとだに
(百人一首より)」



小林 純風 書

225×53cm

◆4行を字粒や大小を違え、リズムよく書き流した点はい。ただ文字が塊ごとに切れるのは一考したい。墨色もやや薄い。

(洋子評)

前衛書 (華芳)

庄 司 紫 千
「慕情」



庄 司 紫 千 書

180×60cm

◆上部と下部の魅力あふれる小さな造形と、中央に広がる大きな造形の対比の妙。中央はもう少し小さくまとめた方がより良かったかも。

(白琉評)

臨 書 (素雪)

坂 本 芳 博
「金文 (駄段)」



坂 本 芳 博 臨

135×70cm

◆金文は起筆・終筆が細く、躍動感があり、たくましい書風である。その特徴をよく捉え、安定した作品となった。お見事。

(藤扇評)

〈大作の部〉

創作の部(42点)

漢字—4点

かな—9点

現代—8点

前衛—21点

臨書の部(11点)

漢字—10点

かな—1点

総出品点数

53点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

大拙 畠中 成山

もく 青木 藤漣

〔かな〕

創珠 阿部 珠翠

水荃 清水 蘭舟

〔現代詩〕

宗苑 白井 真理

八戸 市川 紫泉

誠和 石崎 甘雨

〔前衛〕

容洲 阿部 邑里

松風 西條 松雲

白珠 工藤 史音

月華 浅野 涌翠

紅瑠 川田 弘子

月華 相馬 朱郷

柳賢 二上 香柳

〔臨書の部〕

〔漢字〕

紅瑠 相澤 敦子

大雲 神谷 雲卿

玄穹 千葉 紅雪

遊山 紺野 遊山

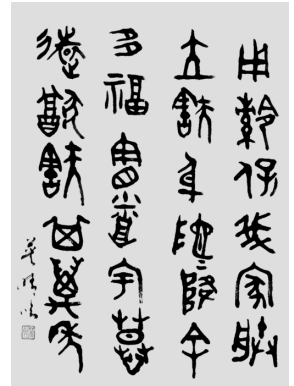
〔かな〕

上泉 早部 朗

漢字研究部
(金文)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



鈴木英晴

漢字研究部 特選 鈴木英晴
起筆収筆がしっかりしています。何より24文字のまとめ方が自然で、さまざまな書体、書風の学習に慣れている感があります。金文と落款の草書体がよくマッチしていることから、日頃の学習量を窺い知ることができそうです。

◎漢字研究部総評
たくさん作品の中から、選び抜かれた写真版の作品が出揃う時、どの作品もよく鍛錬

を積んでいることが推し量れます。
毎日、半紙の枚数を重ねること、
「や」と気脈やリズムが掴めるようになったなあ」と感じるところから始まるのだと思います。
練習の量は、上手くなる・面白くなる秘訣、秘策であると確信するところです。「刺激を受けたり、競える仲間が多くなる」「切磋琢磨できる環境があること」で、日々精進できるのだと思います。



叙孝
麗紅佳叙
流霞子孝
俊澤吾



蘭蘭
葉花子葉芳風
真蘭敦珠雅天



明邑
風子里柳華香
楊明邑香紅泰

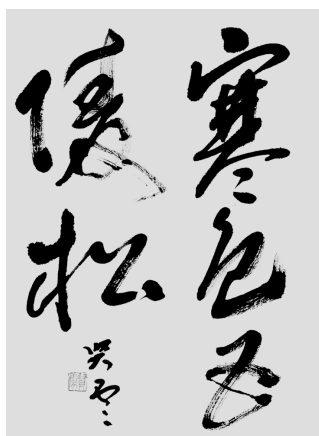


京京
楓祥花蘭子章
美明京等真良

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字29点・かな13点)

選評 小竹 石雲・平川 峰子

漢字秀逸作



高橋 賢雲



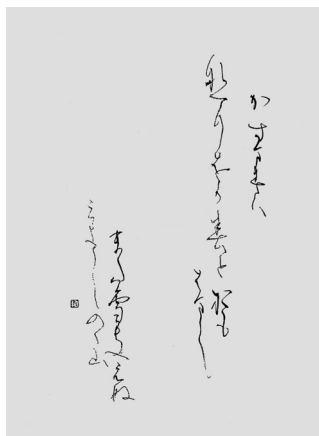
伊澤 香雨



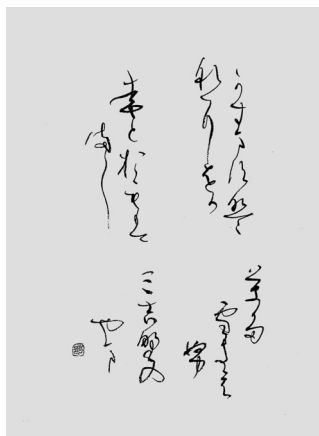
森田 藤谷



白井 真理



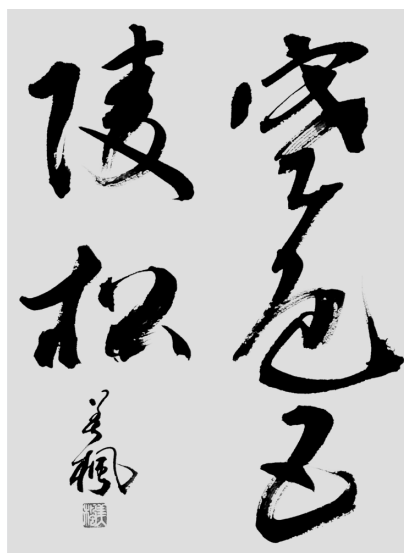
茂木 絢水



齋藤 杏邑

〈次点・50音順〉

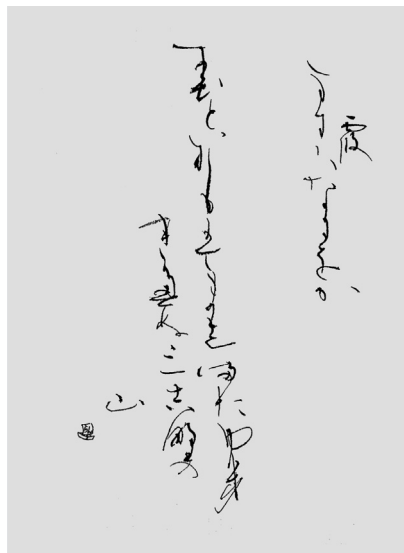
奥村 美楓



伸びやかな運腕から生みだされた頑健で、強固な筆線が紙面を悠然と舞う姿に魅了された。安定した文字造形がこの作品を一層際立たせる。

(石雲評)

かな秀逸作



清水 蘭舟

かな作品には珍しい横の動きに魅されました。文字の結体に時間をかけて丁寧に取り組まれたことが想像されます。リズム感ある強い線条は類い稀です。

(峰子評)

第58回 たままつ 玉松会書展

令和7年4月8日(火)～13日(日)

鳩居堂画廊

中央区銀座5-7-4 鳩居堂ビル3階・4階

午前11時～午後6時(最終日5時終了)

それぞれの思いのこな作品を制作致しました

ご高覧下さいますようご案内申し上げます

お気遣いなくお運び下さいませ

遺墨 永井幸子先生

小島孝子	遠藤紅芝	島田昌子	土屋佳代	峯岸けい子
青木葵郷	奥田瑞舟	島本秀代	寺原恵子	目良まゆみ
荒木王映子	神谷雲卿	清水由紀子	都倉むつみ	山口知子
池田信子	木下千壽子	庄司紅邨	富里敬子	山崎 琴
石井明子	日下文子	陳野原千鶴子	永井則子	山田純子
板倉見智子	工藤妙子	助川きみ	橋本紅霞	横山和子
上田明子	齋藤繁子	諏訪内治子	平井智子	和氣しげ代
植田幹子	佐藤希雲	関口芳枝	平川峰子	渡辺美奈
上野純子	椎貝恭子	武内みどり	藤村昌子	(50音順)
宇於崎裕美	塩澤美紅	田嶋和代	藤原三枝子	
宇田川香奈	七條裕美	田中耶衣	古川雅子	
生方由美子	篠田祐子	近見依未	保坂礼奈	
	島尻龍一	筑井宏子	見越雪枝	

●後援 毎日新聞社 (一財)毎日書道会 (公財)書道芸術院 (公社)全日本書道連盟 かな書道作家協会

●主催 玉松会 事務局 〒180-0002 武蔵野市吉祥寺東町3-20-12 小島方 ☎090(3594)2031

第45回 崇嶺会書道 記念展

●会期 令和7年4月11日(金)～13日(日)

午前9時～午後5時

(最終日は午後4時まで)

●会場 長野県伊那文化会館

〒396-0026

長野県伊那市西町5776

TEL0265-73-8822

●主催 崇嶺会 (会長) 小林古徑

●後援 (公財)書道芸術院

伊那市教育委員会

*日時: 令和7年3月11日(火)～3月16日(日)
(10時～17時、16日は15時30分迄)

*会場: 岡山県天神山文化プラザ 第一展示室
岡山市北区天神町8-54 電話086-226-5005

第37回 岡山県 現代俳句の書展

地元俳人協会の俳句と書のコラボ展に、臨書を加えて開催いたします。

3月16日(日)には、会場にて下記の会員による席上揮毫を行います。

●11時～ 大平 昌峰 ●13時～ 小竹 石雲
草苺 青象

何卒ご高覧賜りますよう ご案内申し上げます。
ご芳志は謹んでご辞退申し上げます。

主催 岡山県近代詩文書道連盟
協賛 岡山県俳人協会



私たちは「日本の書道文化」の
ユネスコ無形文化遺産登録を
応援しています。



真下京子
近作展

2025年4月13日(日)～4月18日(金)
11:00-18:00(4/18は15:00まで)

真下京子 近作展
— 心音 — ひかりを曳きて

ギャラリーコンセプト21

〒107-0061

東京都港区北青山3-15-16

tel/fax 03-3406-0466

e-mail: gallery@bridge.ocn.ne.jp



■アクセス: 東京メトロ表参道駅
(銀座線・千代田線・半蔵門線)
A1・B5出口より徒歩5分

後援/毎日新聞社・毎日書道会・書道芸術院・群馬県書道協会・上毛書人会

第78回書道芸術院展 — 各部の今年度の傾向と来年度に向けて —

・漢字部

。審査会員の作品は、多様性に富んで、見応えがあったが、審候作品は、全体のレベルは高いが、飛びぬけた作品が見られなかった。更なる質の向上を目指し、もう少し思い切りのよい作品を望む。

。誤字、脱字等に注意しながらも、創意に溢れた作品を期待する。

・かな部

。基本の学書が不足しては、新しさの追求も上滑りになってしま

種谷萬城

う。審査員は、特に各自の意識の高さが問われるので、より一層、視野を広く持ち研究してほしい。

。審候は、しっかりと師風を把握し、とにかく書き込む練度が大切！

かなは紙による墨の変化も注意しないと練習時と異なることがあるので、それも念頭に置いて仕上げるようにしたい。

下谷洋子

。動きのある明るい作品が多かった。変化のある造形が良いが、判読困

・現代詩文書部

田村鄭雲

難な文字が散見された。可読性も大切。

。特にかなの学習が不足している。現代的で、魅力のあるかなの表現を身につけたい。

・篆刻・刻字部

後藤大峰

。全般に篆刻、刻字、同数出品傾向でした。最近、刻字の材料の入手が厳しい状況にあり大作が大変になりつつあります。篆刻は、一社中（石心会）だけです。数え揃えるのが難しい感があります。

・前衛書部

津田海仙

。今後は、出品者の高齢化も一つの懸念材料で大変心配しているところではあります。

。各地区のパターン化が進み、おもしろみが薄れてきているように思われる。

。各人、少しの工夫が必要。来年の前衛書展、院展に期待する。

2025年 毎日書道展新会員作家展

本年度から毎日書道展の会員に昇格する作家の展覧会です。
各部の持ち味を表現しました。ご来場いただきますようご案内申し上げます。
毎日新聞社・毎日書道会

〈開催〉
第1期 3月10日(月)～3月15日(土) 第2期 3月17日(月)～3月22日(土)
第3期 3月24日(月)～3月29日(土) 第4期 3月31日(月)～4月 5日(土)
※日曜日休み 3/20(祝)開催

〈時間〉
午前10時～午後5時(但し、毎週土曜日は午後4時まで)

〈会場〉
アートサロン毎日 (入場無料)

第1期	第2期	第3期	第4期
漢字部	漢字部	漢字部	漢字部
青木野郎 浅阿荒飯 田畑石位 伊藤下野 岩上小水	連遙流月 藤光岳略 柳輝知爽 華紅昌惠	華扇美晃 清心郁翠 大大岡岡 崎笠平谷 折片神北 小迫林藤 近	翠園波明 香翠翔啓 中島谷口 田長長橋 廣古三三 水満室矢 渡
かな部	かな部	かな部	かな部
赤羽江塚 磯部大	理朋開泉 節司文浩	玉美子 尚美悦 静子	鴻松子 天秀文 遊舟
近代詩文書部	近代詩文書部	近代詩文書部	近代詩文書部
石川上梅 江田太熊 谷	和玖香華 花溪浄朋 櫻	春汀朱迪 克龍龍節 銀	嵐翠鴻子 雅春朱妙 紅里弥美 雪小
大字書部	大字書部	大字書部	大字書部
市川原	符聖美	新井高	美江天
篆刻部	篆刻部	篆刻部	篆刻部
作佐部京子	笹倉淳		
刻字部	刻字部	刻字部	刻字部
		朝賀恵子	志村松雪
前衛書部	前衛書部	前衛書部	前衛書部
石井梅岡	神華充 光公美	北川蒲田 悦皓裕 子石裕	伏津木 玲奈美

第17回

かながわ書道まつり

東日本大震災・能登半島地震及び自然災害からの復興応援チャリティーイベント

いまできることを能登に!

2025年3月20日(木・祝)～23日(日)
11:00～20:00

ランドマークプラザ 1階・3階

横浜市西区みなとみらい2-2-1

JR京浜東北線桜木町駅下車徒歩5分

みなとみらい線みなとみらい駅下車徒歩3分

不 羅 子 白 車 走 于

戎 工 經 縵 三 才 干 車

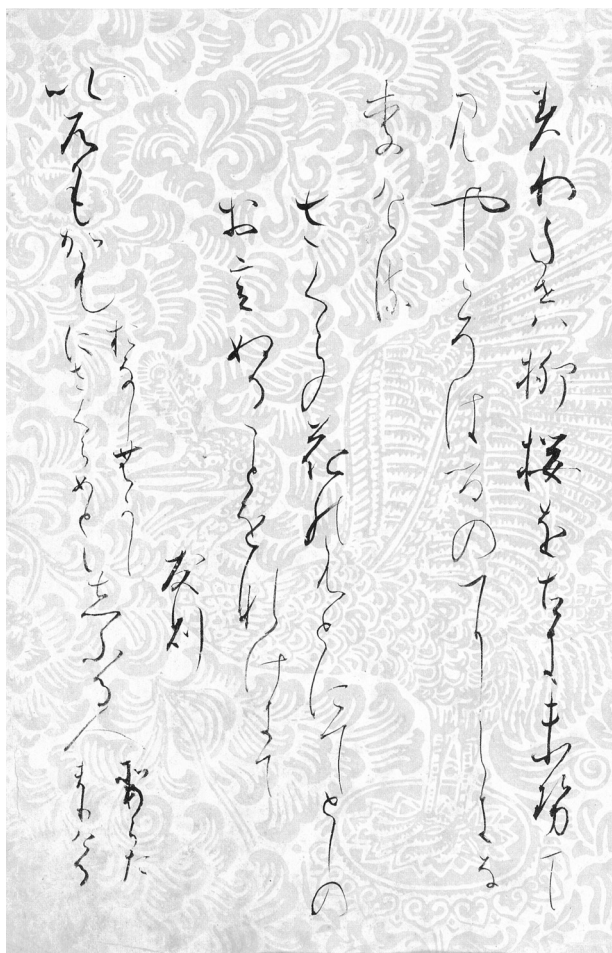
伐 厥 耜 于 洛 上 陽

右に示したのは参考例です。青銅器はサビや欠け、異物の付着等で、点画が不明瞭になることがあります。疑問点は字書でご確認願います。

古筆鑑賞

253

元永本古今集 (伝 源俊頼筆) ①



(掲載図版・70%に縮小)

〈よみ〉

みわたせば柳桜をこきまかせて

みやこぞはるのにしきなりける

さくらの花のもとにてとしの

おいぬることをなげきて

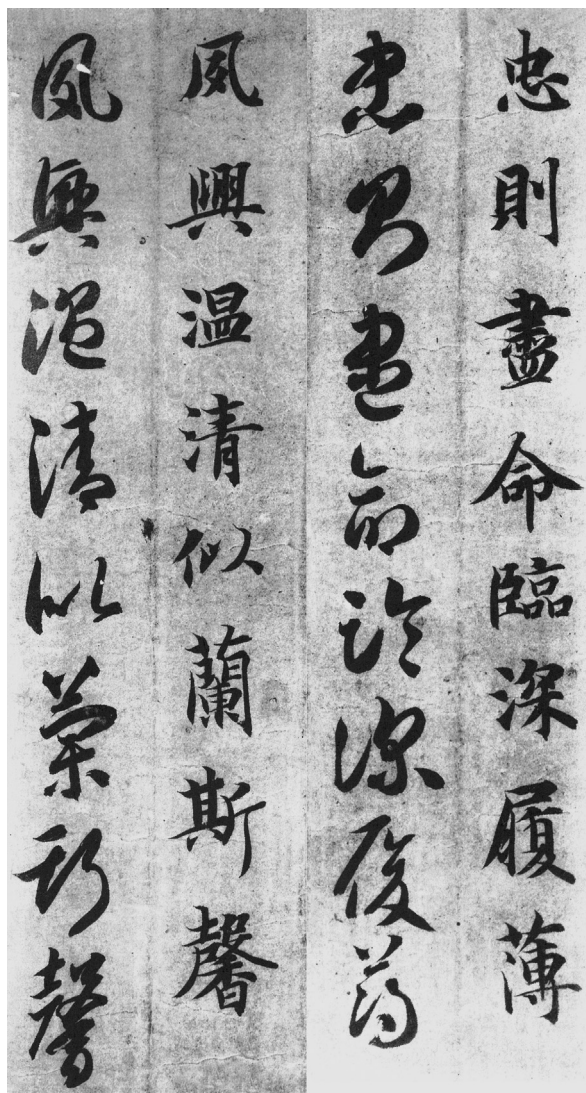
友則

いろもかもおなじむかしにさくら
めど(と)しふる人ぞあらたまりけ
る

古典鑑賞

479

真草千字文 ① (智永)



(掲載図版・70%に縮小)

忠則盡命。臨深履薄。
夙興溫清。似蘭斯馨。

篆刻

【4月15日締めきり】

《出品規定》

- ① 篆刻 課題による語句
- ② 創作 語句自由

○印面の大きさは2.3cm（八分角）以内とする。長方形、変形印は2.5cmを超えないこと。朱文、白文自由。

○印箋は市販のもの、半紙横½の大きさに切ったものも可。

○応募は①か②のどちらかとする。

3月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



齊白石

「狗子」

◎出品方法

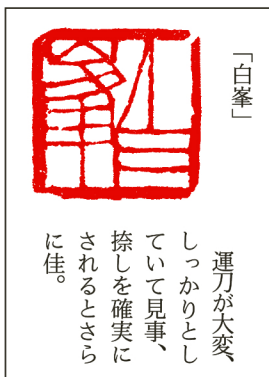
用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

※本号で篆刻部門の募集は終了となります。

765号篆刻優秀作品

篆刻特選

中川 研治

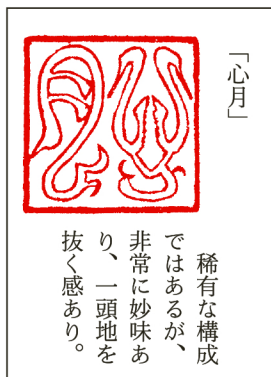


「白峯」

運刀が大変しっかりとしていて見事、捺しを確実にされるところに佳。

創作特選

平塚 由香



「心月」

稀有な構成ではあるが、非常に妙味あり、一頭地を抜く感あり。

◎篆刻部総評

今回は応募作も少なく、やや、低調な感はありませんでした。それでも篆刻、創作ともに、目の引く作品がありました。今後に期待します。

（大峰評）

選評 後藤 大峰

（篆刻）

（創作）

特選

遊雲◎中川 研治

白琥 平塚 由香

秀作（50音應）

秀作（50音應）

大網 片岡 豪峰

唯一 逢沢 唯一

大雲 鷺山 美梢

石心 伊藤 祥花

蒼原 庄司 櫻空

生大 中昌 義則

佳作（50音應）

やま 橋本 清麗

大雲 小沢 華仙

佳作（50音應）

石心 成田 能喜

石心 篠田 華所

入選（50音應）

八街 新村 翠芳

香書 須賀澤 一起

趙雲 吉田 恵弦

生大 吉原 進

入選（50音應）

（選外2名氏名略）

遊雲 赤星 文庵

游水 荒川 裕泉

寿福 大作 優子

今月の注目作

逢沢 唯一



「月」

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話（03）3862-1954

FAX（03）3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。（土日祝日は休み）

送料

1か月の購読部数が

1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上は	送料免除

令和七年 二月二十五日印刷
令和七年 三月 一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 発行人 下谷 洋子

データ処理 株式会社 リンクス
印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

電話（03）3862-1195
FAX（03）3862-1195
振替 00150141355058

ホームページ <http://www.lincs.co.jp/shogi/>

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和七年 二月二十五日 印刷
令和七年 三月 一日 発行

（毎月一回一日発行） 書道芸術 第七六七号